



Data

監督：クラウス・ハロ

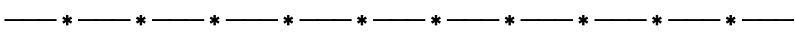
出演：マルト・アヴァンディ／ウル
スラ・ラタセツ／レンビッ
ト・ウルフサク／リーサ・コ
ツペル／ヨナス・コッフ／
ヘンデリック・トンペラー／
キリル・カロー

👁️👁️ みどころ

日本では『宮本武蔵』や『赤胴鈴之助』など剣をテーマにした映画は多いが、第88回アカデミー賞外国語映画賞のフィンランド代表に選ばれた本作の奇妙な邦題は一体ナニ？それは『スウィングガールズ』（04年）と同じような田舎校が初出場したフェンシングの全国大会で初優勝するサクセスストーリーだが、実はウラの物語がすごい！

ドイツとソ連に挟まれたエストニアという小国は大変。第二次世界大戦が終わるとドイツ兵として召集されていた元フェンシング選手はソ連の秘密警察から追われることに。こうなりや「でもしか先生」に。主人公はそう考えたが、フェンシングの血が燃えてくると・・・。

世界にはこんな物語があることを、こんな小作からしっかり学びたい。



■□■この邦題はナニ？なぜフィンランド代表に？■□■

『ここに剣士を』とはなんとも奇妙な邦題だが、本作の原題は『Miekkailija』で、英題は『フェンサー (The Fencer)』。つまり、フェンシングの剣士という意味らしい。日本でも剣道や剣をテーマとした小説や映画は多く、吉川英治の『宮本武蔵』や市川雷蔵が主演した映画『剣』（64年）はその代表。また私が小学校低学年の頃に大人気だったラジオドラマの『赤胴鈴之助』もそれだ。

他方、ヨーロッパの剣道であるフェンシングを売りにした小説や映画の代表は、何といってもアレクサンドル・デュマ・ペールの『三銃士』・・・？『三銃士』は舞台がフランスだが、本作の舞台は1950年代のエストニア。現在のエストニア共和国はいわゆるバル

ト3国の1つだが、私たち日本人には全くなじみのない小国。ところが、フィンランド、エストニア、ドイツ合作映画である本作は第88回アカデミー賞の外国語映画賞のフィンランド代表に選ばれたそうだからすごい。それは一体なぜ？

■エストニアの位置は？主人公の立場は？■

エストニアは地政学的に西の強国ドイツと東の強国ソ連の間に挟まれているから、ポーランドや朝鮮半島と同じように何かと大変な国だ。本作は冒頭の字幕でその大変さが「暗示」される。主人公のエンデル（マルト・アヴァンディ）は一人で田舎町ハーブサルにある学校の教師の面接を受けるべく列車に乗っていたが、これはソ連の独裁者スターリンの秘密警察から逃れるためらしい。といっても、その理由はエンデルが別段西側のスパイだというわけではなく、単に第二次世界大戦中にドイツから召集されてドイツ軍兵士として闘っていたというだけ。そりゃかわいそうだがそんな時代に、そんな国に生まれると、否応なくそんなめぐりあわせに・・・。

エンデルを面接する校長（ヘン德里ック・トンペラー）はいかにもソ連の支配下に入ったエストニアの田舎級の校長らしく、厳格で官僚的。その姿勢はエンデルがフェンシングをしていたと聞いて「労働者階級にふさわしくない競技だ」と断定するところに端的に表れている。レニングラードの友人アレクセイ（キリル・カロ）に3分間電話で手短かに報告した際、彼はエンデルに対してくれぐれも目立つことをするなよと注意していたが、決して要領が良いとは思えないエンデルはホントにこの田舎の小学校になじめるの？

■田舎校のクラブが全国大会に？■

田舎校のクラブが全国大会に出場して大活躍する物語といえば、日本でも矢口史靖監督の『スウィングガールズ』（04年）（『シネマルーム4』320頁参照）が面白かったが、本作のメインストーリー（？）はそれ。エンデルは元フェンシングの選手だったため、田舎の学校の体育教師に採用され、体操クラブの立ち上げ運営を任せられると、どうしてもフェンシング部になったわけだ。もともと、レニングラードからハーブサルという田舎町に引っ越すについては、親友のアレクセイから「決して目立つ行動はするな！」と言われていたから、エンデルは当初は無難な「スキー部」をつくらうとしていたが、用具類を一切軍に供用されてしまうと、仕方なくフェンシング部に。エンデルがそれを進める原動力になったのは、かわいい女の子マルタ（リーサ・コッペル）の力強いまなざしだが、現実には実力を伸ばしてきたのは男の子のヤーン（ヨーナス・コップ）だ。

ちなみに、2016年に廃部になることが決まった高校野球の名門、大阪のPL学園高校は、2016年7月の第98回全国高校野球選手権大阪大会の第2回戦で敗退してしまった。かつてのあれほどの強豪校でもそんなことがあるのだから、いくらよき指導者を得たとはいえロクな道具もない田舎の学校がいきなり全国大会へ出場し、いきなり初優勝す

るというストーリーはちょっと現実離れしているのでは・・・？そう思わざるをえないが、実は本作には、本作を第88回アカデミー賞の外国映画賞のフィンランド代表に押し上げた重大なサブストーリーが・・・。

■□■本作も「事実に基づく物語」！■□■

本作は創作ではなく、エストニアに現実に存在した伝説的なフェンシングコーチの逃亡時代をスリリングに描いたもので、要するに本作も「事実に基づく物語」。そんな映画の場合、冒頭にその字幕が表示されるのが普通だが、本作ではそれが出来ない。そのため事前情報のない観客は、本作導入部以降のエンデルと校長との「対決」をめぐるスリリングな展開に、つい身を乗り出すことになる。

日本でもかつては「でもしか先生」と言われていた。それは「先生にでもなろうか。先生しかできない」という意味だが、冒頭で見る限りエンデルも典型的なそれだ。だって田舎町の先生にでもなってひっそり生活をすれば、レニングラードの秘密警察の目を免れることができるだろう。そう考えると、僕には先生しかできない。そんな思惑だったのだから。しかし、それならそんな思惑通り、校長が貴族趣味だと嫌うフェンシング部を立ち上げたりせずひっそり過ごせばいいのに……。しかも、本作中盤ではぼちぼち秘密警察が動き始める中で意外にも旧友のアレクセイがエンデルを訪れ一緒にシベリアへ逃げようと誘ってくれたのだから、それに乗っかればいいのは当然だ。いくらマルタからフェンシングを教えてくれと頼まれても、そんな要望を無視するのは簡単なことだ。

ところが、器用な生き方ができそうもないエンデルは、校長の意向に逆らっているとわかりつつフェンシング部の立ち上げを強行したり、アレクセイからのシベリア行き（逃亡）の誘いを断って学校に残ったり、更にわざわざレニングラードで行われる全国大会に出場するという目立った行動をとったり……。これでは、まるでスターリンの秘密警察に対して「自分を逮捕してくれ」と申し出ているようなものだが……。

■□■初出場の田舎校が初優勝！ホントにホント？■□■

フェンシングは日本ではマイナーなスポーツだったが、2008年の北京オリンピックで太田雄貴が銀メダルを獲得したことによって一躍メジャーな競技になった。本作のクライマックスは、試合用の正式な用具も持たず、試合用の正式なルールもロクに知らないまま、エンデルが指導する田舎の学校があれよあれよという間に勝ち進んでいく姿となる。

そのエースとして活躍したのは、おじいちゃん（レンビット・ウルフサク）からかつて自分が使っていたフェンシングの剣と面をプレゼントしてもらい、エンデルの指導よろしきを得てぐんぐん力を伸ばしてきたヤーン。エンデルのフェンシング部に入部している40～50名の子供たちのほとんどがおじいちゃんとおばあちゃんに育てられているのは、兵隊にとられた父親の多くが戦争で死亡しているためだ。ヤーンもそのケースだが、かつ

てフェンシングをしていたというおじいちゃんは、「フェンシング部の創設は認めない」と圧力をかける校長に対して、控え目ながらも公然と異議を述べ、保護者の多数決による決定を求めたからすごい。ヤーンはそんなおじいちゃんの下で育ったこともあって、一生懸命に練習に励んだことが全国大会での大活躍につながっていったわけだ。

ところが、決勝戦の残り時間15秒というところで、ヤーンはポイントをリードしたまま無念の負傷！そんな事態に相手チームはニヤニヤしていたが、そこでのエンデルの決断は補欠として出場させていたマルタをヤーンのかわりに出場させること。「私の実力ではとても無理！」「いや15秒間持ちこたえればいいんだ」。そんなやりとりを経てマルタが出場したが、相手選手との身長差は40センチ以上！文字通り上から目線でマルタを見下した相手選手は案の定、残り15秒の間にポイントをあげたから、試合は1分間の延長戦に。こうなれば相手方の優位は明らかだが、いくら身長差があってもマルタだって意地がある……。さて、その延長戦の勝敗は？

■□■栄誉ある優勝の代償は？その後の復活は？■□■

エンデルが全国大会の規定に従って選抜した3名の選手と1名の補欠ははじめて訪れるレニングラードに興奮したし、全国大会での順調な勝利と積み重ねと想定外の優勝に大喜び。そこに参加していた(?)校長も大喜びだったが、フェンシング部の創設を反対していた校長がなぜここに……。それは大会の進行につれて普通の観客とは雰囲気は全く違う秘密警察らしい男の姿が増えていく姿を見れば明らかだ。今すぐにもエンデルを逮捕したい彼らがそれを待っているのは、意外にもエンデルのチームが大健闘し、決勝戦まで頑張っているため(?)だが、決勝戦が終了すれば……。エンデルはもちろん子供たちと共に優勝の感激を分かち合いたいはずだが、それを我慢し自ら秘密警察に同行したのは仕方ないところだ。まだ幼い子供たちにはこの政治的な問題点はわからないだろうが、エンデルにとっては全国大会への出場自体が大きなりスクだったわけだ。

しかして、全国大会での栄誉ある優勝の代償はエンデルの逮捕、強制収容所送りという大変なもの……。スターリン独裁時代のソ連の強制収容所がいかに過酷だったかはアレクサンドル・ソルジェニーツィンの小説『収容所群島』等で明らかだが、そのスターリンが1953年に死亡したのはエンデルにとってラッキーだった。エンデルは全国大会に出かける前に恋人となり、結婚を約束した同僚女教師のカドリ(ウルスラ・ラタセップ)に対して「必ず帰って来る！」と約束していたが、ホントはこれはカラ約束のはず。私はそう思っていたが、スターリンの死亡の結果、その約束は……。？

2017(平成29)年1月6日記